

タスク14 入国児童のための日本語教育

いよいよ最終回となりました。今日は、皆さんに最も関係のある部分かもしれない「入国児童のための日本語教育」について考えてみることにしましょう。

まず、一般的な日本人だけでなく、学校現場の先生方の多くが入国児童に関して以下のような認識をもっているといわれています（岡崎 1999, 原 2003）。皆さんはどう考えるでしょうか？①～⑤までの意見についてコメントを考えてください。

① 子供は大人よりもずっと早く自然に言葉を覚えるので、日本語授業の時間は少なくともいいのではないか。

② 母語を使うことは、日本語の学習を妨げるので、禁止することが児童のためになるのではないか。

③ 日本語を話すのは上手なのに教科の成績が悪いのは、児童が勉強していないか、能力が低いからである。

④ 外国人児童は日本語が上手ではないので、通訳をつけて、授業を受けさせたらよいだろう。

⑤ 外国人児童は日本語が上手ではないので、特別クラスを作ってそこで、日本語や教科を勉強させたほうがよいだろう。



キーワード

① ③ BICS・CALP ② 母語保持・母語消失 ④ 入り込み授業 ⑤ 取り出し授業
？誰が教えるのか？何を教えるのか？何語で教えるのか？どのくらいの時間教えるのか？
？どこでどのような形態で教えるのか？子供だけに教えるのか？

<知ってほしい日本語支援者の声>

- ・日本語教師の声が学校に反映されない
- ・教材を自己負担している
- ・指導回数が十分に確保できない。
- ・日本語指導学級は児童の数が少ないので経営が楽だと思われている
- ・ゲームなどを取り入れるので遊んでいると思われる。
- ・ニーズ（ときには学年・年齢）の違う児童が同じ教室にいるので指導が難しい
- ・子供だからすぐに慣れるなど周りの認識が不足している。

<共有してほしい日本語支援者の悩み>

- ・1年後には母国に帰る学生、どこまで日本語を指導すればいいのか
- ・母国語を忘れてしまう学生にどう働きかければいいのか
- ・入国児童がなかなか日本人の児童のグループに入っていけない。どうすればいいのか。
- ・入学当初は泣いてばかりいた児童だが、いまは落ち着いて見える。しかし、ここは日本だから私が我慢しよう」と思っている雰囲気を感じる。
- ・入国児童、生徒であることを他の児童生徒に知らせたがらない場合どうすればいいのか。
- ・学年があがるにつれ、学習内容が難しくなってますますついていけなくなる。(社会・理科・国語)

出典 縫部義憲 (1999)『入国児童のための日本語教育』スリーエーネットワーク

I バイリンガリズムに関する考え方～セミリンガルからバイリンガルへ

皆さんが一般的に「バイリンガル」と呼んでいる二言語使用者ですが、専門的にはより細かく分けて考えられています。それぞれどのような違いがあるのでしょうか？

○モノリンガル？

○バイリンガル？

○マルチリンガル？

●**セミリンガル (ダブルリミテッド) ?**

注：セミリンガルについては、本来は大人の多言語話者についての定義であり、子供の場合は一時的セミリンガル状態になっているだけであるので、この用語を使うこと自体望ましくないという考え方もある。また、Scctabb-Kangas (1981) は、「セミリンガリズムをというのは少数言語グループである労働者階級の家庭の子供たちが社会の主要言語を使用した教育を押し付けられ、しかも子供の母親の社会的地位が低い場合に生じる現象である。」と説明している。

—私が思うには、将来の重要な教育的課題は、少数民族言語グループの学童にかかっているいろいろなプレッシャーを取り除き、彼らにもアディティブ (加算的) サブストラクティブ (減算的) ・バイリンガリズム・バイカルチュラリズムの恩恵に浴することができるようになることである— Lambert (1977)

II 日本語教育と教科教育の統合モデル～社会科

子供の日本語教育において、学力言語能力（CALP）の支援が重要であることを述べましたが、実際にはどのような支援が考えられるのでしょうか？

☛ここでは、大まかな指導案を実際に考えて見ましょう。実際の「公民」の教科書の指導計画書から項目の内容のうちひとつを選び、1時間分の授業案を考えましょう。その際、外国人児童に対する配慮や指導が必要な部分を考えてみましょう。

授業の段階としては、第3段階、つまり、日本人学生と外国人学生が同じクラスで同じように勉強しているが、外国人学生にはまだCALPに不十分さがある場合を想定してください。

注：↓（第1段階）学校生活日本語クラス

↓（第2段階）日本語・教科統合クラス（テキストなどは外国人学生専用のもの・母語での支援も平行して行う）

↓（第3段階）日本人学生と同じ授業を受ける（大きな困難を感じた場合は統合クラスで補習をうける）

☛ワークシート1

III 対人関係学習

やったことがある方も多いかもかもしれません。最後に、グループエンカウンターの手法を用いた対人関係学習法をやってみましょう。

外国人児童にとって、日本語や勉強の問題にもまして「仲間」ができるということが、最大の困難かつ最大のポイントだと思います。しかし、現在日本の学校でなかなか友人をつくれない外国人児童やいじめにあって退学してしまう児童も少なくありません。

これらの活動は、簡単な活動ですが、児童の関係性に少しずつ変化をもたらしてくれるものだと思います。また、実は、日本語の授業のための導入や、練習にも十分取り入れられると思います。ぜひやってみてくださいね！

1. ウォーミングアップ1 身体エクササイズ

- ・身体指示：教師の指す同じ部分を児童も指し示す
- ・肩もみ：やわらかくもんでもいいし、たたいてもいい。もみながら自由に話してもいい。
- ・鏡：2人一組で一人の動作をもう一人も真似る。行動はゆっくりと途中で交代。

2. ウォーミングアップ2 単語エクササイズ

- ・連想ゲーム：ケーキ→あまい→チョコレート→バレンタイン→かなしい…
- ・生徒の母語でしりとりに children-neck-kind-dream…
- ・ある範疇の単語をいう「動物」「ねこ・いぬ・ペンギン・きりん・ゴリラ…」

3. エクササイズ

＜言葉をつかわないもの：日本語がまだ不十分でも可能です。＞

- ・呼吸法 目をつぶって吸う1. 2. 3. 4 はく1. 2. 3. 4の繰り返し。
- ・頭をゆだねる：2人一組 寝ているひとの頭を両手で支え、少し持ち上げる(2回)。
- ・目隠し歩き：2人一組。一人は目を閉じ、もう一人が誘導する。様々な行動の組み合わせも可

＜言葉を使って行うもの：より深く印象的に関係性を構築できます。＞

- ・肩に手をおく：一列になり前の人の肩に手を置き、目をつぶる。その感覚の感想をいう。
- ・クラスター：同じものが好きなもの同士でグループを形成する。教師が「季節」といったら、児童は「春！」などといながら同じものが好きな人同士で固まって座る。そしてどうして好きなのかを話し合う。
- ・ジェスチャー：感情をあらわす表現を書いておく。ペアの一人の児童はそれを見てジェスチャーで表現する。もう一人はその意味を推測する。わかったら次のカード。途中で交代。全体やグループでもできる。
- ・習慣インタビュー：いろいろな人にインタビューする。「はいそうです。」という答えをもらうまで同じ人に聞き続ける。「毎日漢字を勉強している。」「毎日サッカーをしている」「毎日漫画を読んでいる」・・・
- ・あなたの●●が好きです：二十の輪になって、向き合う。教師の指示でペア交代。お互いに、好ましいと思う点、すてきだと思う点を指摘しあい、言われた人はそのうちのどれが一番自分でも気に入っているか話す。

日本語・教科統合授業計画(第3段階) 社会科

本時の学習項目:

本時の学習目標:

授業の流れ

学習者の動き

配慮すべき点

--	--	--

Q:外国人児童の教科理解を促進するために授業前・授業後に何かサポートできることはありますか？

より深く学びたい人へ

迫田久美子(2004)『日本語教育に生かす 第2 言語習得研究』アルク

中島和子(1998)『バイリンガル教育の方法 12歳までに親と教師ができること』

山本紀美子(1996)『子供のための日本語教育』アルク